翻訳をすること、教えること

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上岡, 伸雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7459

翻訳をすること，教えること

上　岡　伸　雄

いきなり恐縮だが，次の英文を訳していただきたい。

> The ore was loaded onto large ore boats which then made the journey through the locks which connected Lake Superior to Lake Huron to Lake Erie and to the town of Ashtabula, Ohio.

これは，文学部の英語大人数授業でも使われている *Geography in U. S. History* の5章からの一文。用語が多少特殊だから説明すると，“ore” は「鉱石（この場合は鉄鉱石）」，“ore boat” はその鉱石を運ぶ船，“lock” は「運河の閘門（水門に挟まれ水位を上下させることができる部分）」である。

さて，この文章を学生に訳せと言ったとき，多くの学生が次のように訳すのではないか。そしてこれは，私の授業で現実に起きたことである。

「スペリオル湖からヒューロン湖，エリー湖，そしてオハイオ州アシュタブラまでを結ぶ閘門を通って旅をする大きな鉱石船に鉱石は積み込まれた」

これが自然な日本語と言えるだろうか？

学生の過ちは明らかである。一言で言えば，受験英語の英文和訳に囚われていることだ。受験英語ではしばしばこう教える。「関係代名詞の前にコンマがあれば前から，コンマがなければ後ろから訳しなさい」。つまり，『ランダムハウス英和大辞典』の用例から借用すると，“He asked the question which he felt needed asking” を「彼は訊く必要があると感じた質問をした」と訳す。それを適用すれば，冒頭に掲げた英文も学生が訳したように訳さなければならない。

しかし，言うまでもないことだが，冒頭の文章は文の流れがそのまま時間の経過とも通じるような文章である。つまり，鉱石が船に積まれ，閘門を通って旅をし，スペリオル湖からヒューロン湖，エリー湖，そしてオハイオ州ア

シュタブラまで至る，ということなのだ。これは前から順に読んでいかなければ意味を成さない。

私が授業で翻訳を教えるとき，学生にまず言うのはこのことだ。すなわち，「原文の順序を大切にしろ」ということ。そしてその理由は簡単だ。英語を母語とする人たちが英文を読むとき，後ろから読むわけがないからである。

当たり前すぎることなのだが，英語を母語とする人たちは前から読んでいって，意味を取っていく。日本人だって，その方が理解しやすいはずである。それなのに，どうして後ろから読まなければいけないのか？　そもそも，後ろから無理に訳そうとすることは，原文が本来持つリズムを崩していることではないか？　ランダムハウスからの用例にしたって，たとえば「彼は質問をした，どうしても訊かねばならないと感じていた質問を」というふうに訳した方が原文のリズムに忠実ということになるのではないか？

このように「後ろから訳す」という悪癖について，私が嫌になるひとつの理由は，これが学生たちの「意味さえ取れればよい」，つまり「原文のリズムや微妙なニュアンスなどどうでもいい」という態度と通じると思われるからだ。

学生に小説についての感想を言わせると，多くの学生が「作者の言いたいことは……です」と一言で言いたがる。戦争小説を読ませてみれば，普通の学生は戦争をいけないことだと思っているから，その感想はすべて「作者の言いたいことは戦争をしてはいけないということです」になってしまう。その一言を言いたいだけだったら，こんなに長い小説を書く必要がないではないか？　そう問いを発してみると，学生は困ってしまう。彼らにしてみれば，こんなに長い小説を読むのも嫌なのだから，まして書く人の気が知れないのだろう。

どうしてこうなってしまうのかというと，これは学生たちが小説を読みつけていないからという一言に尽きる。つまり，小説の中にのめりこみ，登場人物に感情移入して読むことがない。小説の中で起きていることは「他人事」に過ぎないのである。したがって，戦争小説を読ませたときの感想には次のようなものも多い。

「これは戦争に行った者でなければわからない感情だと思う」。

こう言ってしまって，学生たちはこれ以上深く考えることをしない。この感想は言い換えると，「自分は戦争に行っていないからこんな小説読まされてもわかりません」ということなのだろう。

さらに，次のような感想もよくある。それは，間違った戦争だとわかっていながら戦争に行ってしまった者が，罪の意識を語る小説への感想だ。

「同じ体験をしていない私が彼を責めることはできない」。

こういう感想を読むと私はがっかりしてしまう。

これは実に残念な話だ。戦争小説で描かれていることは，言うまでもなく，もう少しで死にそうになったり，重傷を負ったり，親しい人が死んでしまったり，自分の責任で誰かが死んでしまったり，自分では道徳的に間違っていると思っていることをしなければいけない立場に追い込まれたりすることである。そのどれも，日常生活で起こりうることではないか。にもかかわらず，多くの学生は「他人事」としてしか読めないのである。他人の苦しみを「他人事」としてしか感じない人間が増えているのではないかと心配になってくる。

話を戻すと，このように小説にのめりこめないということが，翻訳に対する態度にも通じているのではないか。私はそう感じている。先ほど述べたように，「作者が言いたいことを一言で言えればいい」と考えている者にとって，一語一句のニュアンスを大切にしようといった気持ちが起きないのは当然だ。しかし，文学を味わうということは，あら筋を理解することではない。一語一句を大切にして，深く味わっていくことだ。それを，翻訳を通して少しでも教えられればと思っている。

というわけで，ここ数年，私はゼミ形式の授業では必ず「翻訳を学ぶ導入としたい」ということを謳うようにしている。そして，私がまず学生に言うことは，英語の語順に忠実に訳せ，ということである。こうして一語一句を大事に読んでいく態度を身につけてほしいし，何よりも受験英語の呪縛から逃れてほしいと考えている。

では，もうひとつ翻訳の例を挙げてみよう。私が訳したドン・デリーロ『ボディ・アーティスト』の冒頭である。

> Time seems to pass. The world happens, unrolling into moments, and you stop to glance at a spider pressed to its web. There is a quickness of light and a sense of things outlined precisely and streaks of running luster on the bay. You know more surely who you are on a strong bright day after a storm when the smallest falling leaf is stabbed with self-awareness. The wind makes a

sound in the pines and the world comes into being, irreversibly, and spider rides the wind-swayed web. (Don DeLillo, *The Body Artist* [Scribner], p.7)

デリーロという作家は意識的にプロットを排除する人なので，それこそ単純にあら筋にすることができない。この冒頭は嵐の後，すべてが新しく見えるような感覚，すべてが一刻一刻起こっているような感覚——その時の流れを強烈に意識していること——が言語化されている。海の表面の光の筋，巣にしがみつく蜘蛛さえも，新たな光が当てられたかのように鮮烈に浮かび上がってこないだろうか。散文詩的とも言えるこのような小説を「作者の言いたいこと」で片づけようとしても何の意味も成さない。これは一語一句を味わっていくしかないし，翻訳も一語一句を大事にして訳していくしかない。

ひとつ裏話をすると，現在デリーロは出す作品ごとに多くの言語に訳されており，そのため各国の翻訳者がデリーロと質疑応答し，その質疑応答をまたすべての翻訳者たちが参照できるように配布してくれている。他言語の訳者の疑問が必ずしもこちらの疑問と一致するわけでもないのだが，しかしそれによってこちらの疑問が解消されることもよくある。

この冒頭の場合，外国の翻訳者が "quickness" と "streaks of running luster" について説明を求めていた。デリーロの答えは，前者については "sharpness, precision", 後者については "bands of moving light, streaky reflections" だった。どちらもさほど疑問になるところではないのだが，それにしても自分の語感が正しいかどうかは確かめられる。ただ，作者がパラフレーズしてくれていても，もとの単語のニュアンスは大切にしなければいけない。この場合，"quickness" や "running" がもつ光の動き（その速さ）といった感覚が訳文に出せるようにしたい。

先ほど述べた「原文の順序を大切にしろ」という点に関しては，こういう散文詩的な小説の場合は特に大事である。単語ひとつひとつで世界が出現していくような感じは，パラフレーズしようがないし，できたらそのままの語順で日本語にしたいくらいである。この冒頭の場合，単純な文章が多いのでそれほど問題はないが，少し工夫がいるのは "You know more surely who you are on a strong bright day after a storm when the smallest falling leaf is stabbed with self-awareness." ではないか。ここは，"when" 以下から訳すようなことはしたくない。"You know more surely who you are"

をまず訳し，それに以下を続けていくような訳文にしたい。

この次の文には，“irreversibly” という挿入がある。ここも「世界は不可逆的に出現する」としてしまうのは面白くない。「世界は一刻一刻出現していく」ということがまずあり，その次に「それが元に戻せないのだ」という感覚がある。それを伝えるには，――を使って挿入することにする。――の乱用もあまり薦められないが，とはいえ英語のように気楽に単語やフレーズを挿入できてしまう言語に対し，日本語はそれがしにくい。ある程度，原文にない――や括弧などを使うのはしかたないと考えている。

ともかく，このような方針で訳していったのが以下の訳文である。いかがだろうか。

> 時は流れているように思われる。世界は生じ，一刻一刻へと展開していく。そしてあなたは手を止め，巣に貼りついた蜘蛛を見やる。光の機敏さ，物が正確に縁取られた感覚，湾に走る光沢の筋。こういうとき，あなたはより確かに自分が何者であるかを知る。嵐が過ぎ去った後の陽射しの強い日，ほんの小さな落ち葉でさえも自意識に刺し貫かれているような日に。風は松の木々に当たって音を立て，世界は出現する――それを元に戻すことはできない――そして蜘蛛は巣にしがみついて風に揺られている。

一言付け加えるなら，このデリーロのもののような小説を学部学生の授業で読むのはかなり難しい。やはりある程度はプロットがあり，それを手がかりにしてディスカッションできるものを取り上げるようにはしている。ただ，あら筋を手がかりにするにしても，そこから抜け落ちる部分に注意を向けさせ，一語一句を深く味わう方向へ持って行ければと考えている。

翻訳をするに当たって，そして教えるに当たって，まず気をつけることは「原文の順序を大切にすること」だと述べてきた。それは，原文の一語一句を大切にすることであり，そもそも原文を深く味わうことにもなるという考えからだ。学生にはまずその習慣を身につけてもらいたいと思っている。それ以外に，自分で心がけていること，そして学生にもよく言うことが二点ほどある。それを挙げてこの文章を締めくくりたい。

ひとつは，とにかく辞書を引きまくることである。学生に訳させると，おかしな日本語を堂々と書いてくる学生がいるのだが，これは必ず辞書引きを

怠ったために起きている。たとえば "The supermarket did not carry mustard oil" を「スーパーマーケットはマスタードオイルを運んでいなかった」と訳していては話にならない（これも授業で起きたことである）。日本語が変だと感じたら，必ず辞書で確かめてほしい。そうすれば，この carry の意味が「(店に) 置く」という意味だということがわかるはずだ。この習慣をつければ，また単語ひとつひとつの奥の深さにも気づいてくれるのではないかという期待もある。

私が学生にするもうひとつのアドバイスは——これも言うまでもないのだが——日本語も英語も良い文章をたくさん読むことである。一語一句を大切に味わっていくことを習慣にしていき，たくさん読んで，言語感覚を磨いてほしい。それがまた，精神的に豊かな人生を送ることともつながっていくと信じている。